

琉球大学学術リポジトリ

小学校社会科教科書6年下にみるアフリカに関わる記述の課題：
開発教育の視点から地理教育の役割を考える

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 (社会科教育教室) 公開日: 2007-04-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 西岡, 尚也, Nishioka, Naoya メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/357

小学校社会科教科書 6 年下にみるアフリカに関わる記述の課題

— 開発教育の視点から地理教育の役割を考える —

西岡尚也

1. はじめに

2004 年はイラクへの自衛隊派遣でスタートした。これに疑問を持った宮崎県の高校生が「平和的な手段による復興支援と自衛隊の撤廃請願書 (5,358 人署名付き)」を、小泉首相に提出した。このことに関連して、首相は「読んでない」としたうえで、「…イラクの事情を説明して、国際政治(は)複雑だという点を、先生がもっと生徒に教えるべきですね。」と記者団に答えた⁽¹⁾。また河村文部科学大臣も「…(イラクへは)武力行使に行くのではないことをしっかり(子供に)理解させる必要がある。…」と学校現場の指導に注文をつけたという⁽²⁾。

首相や大臣が教育に指導や注文すること自体問題があるのだが、それ以上に筆者はこの二人が学校教育現場に認識がないことにショックを受けた。彼らは、わが国の社会科教科書で、どれだけイラクを含む「第三世界(途上国地域)」がとりあげられ、教えられてきたかを知っているのだろうか⁽³⁾。一体日本国民の何%がイラクの正しい位置を世界地図で答えられるだろうか。

かつて、アメリカ合衆国の大学生の 95% がベトナムの正確な場所を世界地図で示せなかった。この事実でショックを受けたアメリカ政府は、上下両院にて「全国地理意識強化週間の宣言文」を合同決議した。そして 1987 年以来、毎年 11 月の 1 週間を「地理教育啓蒙運動週間」とし、地理教育拡大のキャンペーンを実施している。宣言文には「…将来国家間の相互依存・相互関係の関係が増す中で、それに十分耐えうる合衆国市民を育てるには世界地理の知識が果たす重要性について、国民の注意を促さなければならない。」とある⁽⁴⁾。

「教育の国際化」「国際貢献」を唱える日本政府の意気込みとは逆に、国民の世界認識の現状には大きなギャップがある。この背景には地理教育を軽視してきた歴史がある⁽⁵⁾。

筆者は、学校教育でイラクを含み第三世界(地域)をきちんと教えれば、「自衛隊派遣以外の分野」で日本の国際貢献が必要、という世論が高まると考える。したがって首相や大臣とは異なる理由で、第三世界の現状を教材化することには賛成である。

2. 本稿の目的

地理教育は国際理解・異文化理解に関わる教育の側面を持っている⁽⁶⁾。同時に小中学校の地理教育は、生涯学習における地理教育の出発点でもある⁽⁷⁾。

すなわち発達段階系列⁽⁸⁾から考慮して、小学校で培われた「地理的な見方や考え方」は、生涯に大きな影響をもたらし、世界認識形成や地域イメージを左右するのである。

菊池利夫(1960)は、このような世界認識形成における地理教育の責任を、「…他国民への偏見や憎悪や協力の道をとざす障害を取りのぞき、国際的な反感を駆逐して、同情と協力を確立するためには、…(中略)…偏見と偏狭を善意と開放的な態度におきかえなければならない。」と述べている⁽⁹⁾。

また山口幸男(1998)は、児童・生徒の世界空間における地域イメージ形成の際に生じる問題を、「地域優劣意識」として指摘している⁽¹⁰⁾。

本稿ではこのような地理教育の役割を考える材料として、小学校社会科教科書の世界地理分野で、第三世界(地域)が軽視されている問題点

西岡尚也：小学校社会科教科書6年下にみるアフリカに関わる記述の課題

表1：小学校社会科6年下、検討した教科書の一覧（2003年度供給分）

番号	発行所	著作者	書名	記号	検定済年
①	東京書籍	佐々木毅ほか	新しい社会6下	社会602	2001年
②	大阪書籍	清水毅四郎ほか	小学社会6年下	社会604	2001年
③	教育出版	伊藤光晴ほか	小学社会6下	社会606	2001年
④	光村書院	森 陸夫ほか	社会6下	社会608	2001年
⑤	日本文教出版	水越敏行ほか	小学生の社会6(下)	社会610	2001年

出典：文部科学省HP「小学校用教科書目録(社会)」により作成。

表2：中学校社会科地理教科書、検討した教科書の一覧（2003年度供給分）

番号	発行所	著作者	書名	記号	検定済年
⑥	日本書籍	江波戸昭ほか	私たちの中学社会 地理的分野	地理701	2001年
⑦	東京書籍	田辺 裕ほか	新しい社会 地理	地理702	2001年
⑧	大阪書籍	足利健亮ほか	中学社会 地理的分野	地理703	2001年
⑨	教育出版	奥田義雄ほか	中学社会 地理 地域に学ぶ	地理704	2001年
⑩	清水書院	西脇保幸ほか	新中学校地理 日本の国土と世界	地理705	2001年
⑪	帝国書院	中村和郎ほか	社会科中学生の地理 世界の中の日本	地理706	2001年
⑫	日本文教出版	山本正三ほか	中学校の社会科地理 世界と日本の国土	地理707	2001年

出典：文部科学省HP「中学校用教科書目録(社会)」により作成。

表3：各教科書で事例として詳しく記載されている国

教科書	詳しく記述されている国				
	①	②	③	④	
小学校	①	アメリカ合衆国	韓国	ブラジル	中国
	②	韓国	中国	アメリカ合衆国	オーストラリア
	③	中国	アメリカ合衆国	タイ	ブラジル
	④	中国	アメリカ合衆国	サウジアラビア	オーストラリア
	⑤	アメリカ合衆国	中国	サウジアラビア	
中学校	⑥	中国	イギリス	アメリカ	
	⑦	アメリカ合衆国	マレーシア	フランス	
	⑧	中国	アメリカ合衆国	イタリア	
	⑨	中国	アメリカ合衆国	オランダ	
	⑩	オーストラリア	中国	オランダ	
	⑪	中国	アメリカ合衆国	ドイツ	
	⑫	韓国	アメリカ合衆国	ケニア	

表4：事例として詳しく紹介されている国が登場する回数
(合計の上位順、同数の場合は50音順に表示)

国名	小学6年下	中学校地理	合計
アメリカ合衆国	5社	6社	11回
中国	5	5	10
オーストラリア	2	1	3
韓国	2	1	3
サウジアラビア	2	0	2
ブラジル	2	0	2
オランダ	0	2	2
イタリア	0	1	1
ケニア	0	1	1
タイ	1	0	1
ドイツ	0	1	1
フランス	0	1	1
マレーシア	0	1	1

表 5 : 小学校社会科教科書 6 年下で用いられた写真の撮影された国と枚数

①	②	③	④	⑤
アメリカ合衆国 15 韓国 11 中国 7 ブラジル 5	中国 11 アメリカ合衆国 10 オーストラリア 8 韓国 7	中国 7 アメリカ合衆国 6 タイ 5 ブラジル 4	アメリカ合衆国 16 中国 14 オーストラリア 6 サウジアラビア 5	アメリカ合衆国 19 中国 18 サウジアラビア 16
カンボジア 1 コンゴ民主共和国 1 スーダン 1 ソマリア 1	インド 1 カナダ 1 カンボジア 1 コスタリカ 1 チェコ 1 タヒチ 1 トルコ 1 ドイツ 1 マレーシア 1 モーリタニア 1 モルジブ 1 モンゴル 1 ユーゴスラビア 1	オーストラリア 3 マレーシア 3 コンゴ民主共和国 2 イギリス 1 イラク 1 カナダ 1 サウジアラビア 1 トルコ 1 フィリピン 1 ラオス 1	フィリピン 3 イギリス 2 ケニア 1 スーダン 1 セネガル 1 ルアンダ 1	カンボジア 3 イギリス 2 マレーシア 2 イエメン 1 韓国 1 コンゴ 1 サモア 1 タンザニア 1 ボリビア 1 東チモール 1 ニューギニア 1
アフリカ? (不明) 3	アフリカ? (不明) 1			アフリカ? (不明) 4

備考：太字は事例として詳細に記載されている国。コンゴ、タヒチは国名ではない。
同数の場合は 50 音順で表示。

表 6 : 福澤諭吉『世界国尽』のランク付け

蛮野	混沌	アフリカ内地・ニューギニア・ オーストラリアの土人
	蛮野	中国北方・タタール・アラビア・ 北アフリカの土民
文明開化	未開 または半開	中国・トルコ・ ペルシアなど
	文明開化	アメリカ合衆国・イギリス フランス・ドイツ・ オランダ・スイスなど

表 7 : 開発教育の目標

①多様性の尊重	開発を考えるうえで、人間の尊厳性の尊重を前提として、世界の「文化」の多様性を理解すること。
②開発問題の現状と原因	地球社会の各地にみられる「貧困」や「南北格差」の現状を知り、その原因を理解すること。
③地球的諸課題の関連性	開発をめぐる問題と環境破壊などの地球的諸問題との密接な関連を理解すること。
④世界と私達のつながり	世界のつながりの構造(相互依存)を理解し、開発をめぐる問題と私達自身との深い関わりに気づくこと。
⑤私達のとりくみ	「開発」をめぐる問題を克服するための努力や試みを知り、「参加」できる能力と態度を養うこと。

出典：開発教育協議会ホームページによる。

を、特に「アフリカに関わる記述」に焦点を当て検討する。加えてこの方面における地理教育のあり方を開発教育の視点(西岡 1995 他)から考察することにする⁽¹¹⁾。

検討した教科書は、2003年4月現使用の小学校社会科6年下5冊①～⑤である(表1)。また内容比較に中学校社会科地理分野7冊⑥～⑫を用いた(表2)。以下本文中では便宜上①～⑫の表記を用いる。

3、学習指導要領と教科書記述

小学校社会科における世界地理学習は、6年下の教科書からスタートする⁽¹²⁾。学習指導要領6学年の目標には「…我が国と関係の深い国の生活や国際社会における我が国の役割を理解できるようにし、平和を願う日本人として世界の国々の人々と共に生きていくことが大切であることを自覚できるようにする。」とある⁽¹³⁾。内容の取り扱いには、「…我が国とつながりが深い数か国を取り上げること。(下線筆者)」とある⁽¹⁴⁾。

同様に中学校における世界地理学習は、1学年または1～2学年⁽¹⁵⁾において実施される。学習指導要領地理的分野の目標には「日本や世界の地理的事象に対する関心を高め広い視野に立って…(中略)…地理的な見方や考え方の基礎を培い、我が国の国土に対する認識を養う。」とある⁽¹⁶⁾。内容の取り扱いには、「…二つ又は三つの国を事例として選び、具体的に取り扱うようにすること。(下線筆者)」とある⁽¹⁷⁾。

教科書は学習指導要領に沿って記述・編集されている。したがって事例として登場する世界の国は、小学校6年下では「数か国」、中学校では「二つ又は三つの国」になる。

表3は各教科書において、事例として詳しく紹介されている国名である。また表4は表3を登場回数の多い順にまとめたものである。

これらを見るとアメリカ合衆国と中国の2か国が小中合計12冊の教科書のうち、10冊以上(アメリカ11冊、中国10冊)で紹介され圧倒的に多い。続いて合計で3冊のオーストラリアと韓国、2冊のサウジアラビア、ブラジル、オランダとなる。以下1冊は、イタリア、ケニア、タイ、ドイツ、フランス、マレーシアの6か国

である。

地域(州)別の国は、アジア6か国、ヨーロッパ4か国、であるのに対し、北アメリカ・南アメリカ・オセアニア・アフリカはそれぞれ1か国となる。しかしアメリカ合衆国は11冊、ブラジルが2冊、オーストラリアが3冊と複数であるのに対して、アフリカではケニアが唯一1冊(中学⑫)のみで取りあげられている。

このことから小中学校の教科書で最も重要視されている地域はアジアとヨーロッパ、また国ではアメリカ合衆国と中国である。逆に最も軽視されている地域は、アフリカである。以下本稿では記述分量で最も軽視されているアフリカに焦点を当て、その具体的な課題を検討する。

世界認識(イメージ)形成の重要な時期に、どの地域・国を選び重点的に教えるかは非常に大切となる。少なくとも小学6年と中学1年は連続しているので、同じ国が反復して教科書に登場することは避ける方が良く、特定の国に記述が集中するとは問題である。その意味からも、小中で連携した教科書記述、詳しく取り上げる国の選定が必要となる。

4、小学校社会科6年下のアフリカ記述の検討

(1) アフリカに関する写真について

写真は地理学習に不可欠な教材である⁽¹⁸⁾。いかに事象を正確に記述しようとしても、文章だけではその目的が達せられないもどかしさがある。そういう時には、千万言を費やすよりも一枚の写真が雄弁に物語ってくれる⁽¹⁹⁾。特に小学校では、文章記述以上に写真がその地域のイメージを形成する際に重要な手段となる。

表5は小学校社会科6年生下の、5社の教科書で用いられている外国の写真を撮影国ごとに枚数で表したものである。当然であるがどの教科書も、事例として取り上げた国(表5中太字で示した国)の写真が多くなる。したがってアフリカに関する写真は極端に少なく、撮影国が記載されているものは、教科書①のコンゴ民主共和国、スーダン、ソマリア各1枚、②のモーリタニア1枚、③のコンゴ共和国2枚、④のケニア、スーダン、セネガル、ルワンダ各1枚、⑤のタンザニア1枚の合計10枚である⁽²⁰⁾。



写真1：スーダンの子供たちをはげます
国際連合のユニセフ親善大使の黒柳徹子さん
(出典：① p.45)



写真2：飢えに苦しむ子どもたち
(出典：① p.47)

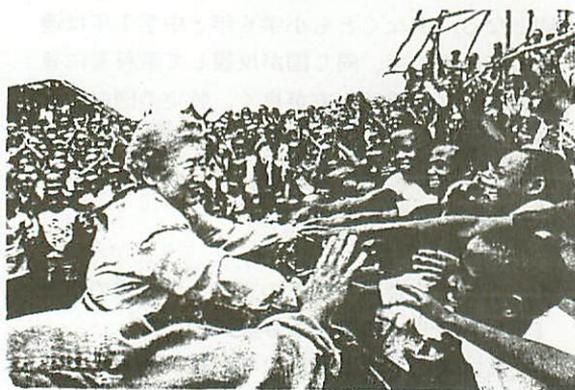


写真3：活動する緒方貞子さん、…コンゴ民主共和国
の子どもたちをはげましています。
(出典：① p.51)



写真4：ミルクを飲む子ども
(出典：② p.27)



写真5：コンゴ民主共和国の子どもたちを
はげます黒柳徹子さん(出典：③ p.46)



写真6：食糧の配給を待つ子どもたち
(コンゴ民主共和国)(出典：③ p.46)



写真7：飢えに苦しむ子どもたち
(スーダン) (出典：④ p.49)



写真8：飢えに苦しむ
子ども (出典：⑤ p.28)



写真9：難民を乗せたユニセフ
のトラック (出典：⑤ p.28)



写真10：ユニセフによる検診活動 (出典：⑤ p.31)



写真11：ソマリアの内戦 (出典：① p.51)



写真12：ルアンダの少年従軍兵
(出典：④ p.60)

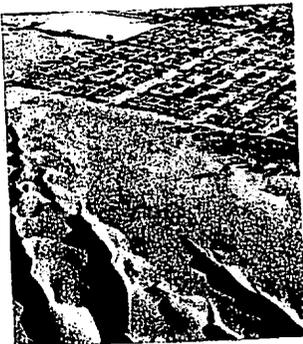


写真14：おしよせるさばく
(1978年モーリタニア) (出典：② p.45)

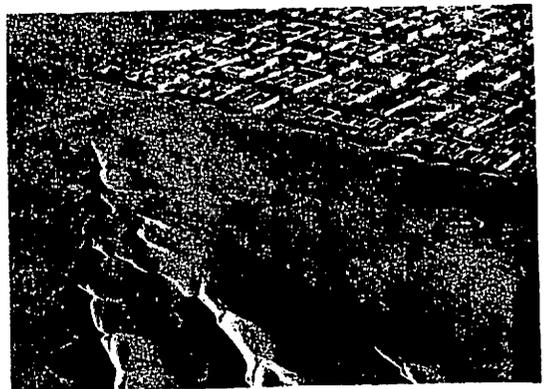


写真13：アフリカ北部に広がるさばく化
(出典：① p.53)



写真 15：アフリカで農業を指導する海外青年協力隊の人
(出典：① p.44)



写真 16：青年海外協力隊(セネガル)
(出典：④ p.52)



写真 17：稲作の指導(タンザニア)
(出典：⑤ p.41)



写真 18：ケニアの植林運動
(ただし指導書の説明、教科書には説明なし)
(出典：⑤表紙うら口絵)



写真 19：地球のなかまたち
ケニア共和国(出典④口絵)

この他にも撮影国が明記されていないが、アフリカに関わると考えられるものが、①に3枚、②に1枚、⑤に4枚ある⁽²¹⁾。これらを含めても全5冊の教科書に登場するアフリカに関係した写真は、合計19枚のみである(表5)。一国で66枚(一冊では教科書⑤の19枚が最多)もの記載があるアメリカ合衆国と比べれば、情報量には極端な格差がある。

《人物(子供たち)を写した写真》

写真1～写真10は教科書①～⑤に記載された、アフリカにかかわる人物を写した写真である。まず気付くことはいずれも「マイナスイメージ」で説明文が書かれていることである。これら10枚は、「子どもたち」を中心に写されたものであるが、その写真に付けられた説明には、黒柳徹子さん緒方貞子さんに「はげまされ」たり、また「飢えに苦しむ」「食糧の配給を待つ」「難民」で「検診⁽²²⁾活動」を受けている様子とある。これらを見る小学生に「悲惨さ」のみを誇張し、限られた情報として伝える危険があると考えられる。

さらによく見ると写真2と写真6は、同じものである。しかしタイトルが違うし、写真2には撮影国の記載がない。他にも写真4、8、9、10には撮影場所(国名)がない⁽²³⁾。

写真11、12は紛争にかかわるものであるが、こちら「危険なイメージ」を連想させ、決して「明るい」写真ではない。飢餓・難民・紛争よりも、もっと日常生活や家族・学校の授業風景などがどうして掲載されないのだろうか。という素朴な疑問がわいてくる。

《環境問題の写真》

写真13、14は同じ写真で、その説明には「アフリカ北部に広がるさばく化」「おしよせるさばく」とある。写真13には撮影場所と撮影年が記載されていて、1978年モーリタニアの写真であることがわかる。しかし本当にこの写真が「砂漠化」を表しているのだろうか。また「押し寄せる砂漠」は、この写真で見える限り卓越風による「砂の移動」であって、「砂漠化＝砂漠面積の拡大」の写真ではないという疑問が拭い去れない。いずれにせよこの2枚も自然災害ということで、「マイナスイメージ」の写真である。

《その他の写真》

これに対して、写真15・16・17は、ガーナ、セネガル、タンザニアにおける青年海外協力隊員の活動の様子である。(ただし写真15には国名がない⁽²⁴⁾。)これまでの写真1～14と異なり「マイナス」イメージでなく、救われた気持ちになる。写真18は教科書には一切説明がないが、教師用指導書にはケニアの植林運動とある。

写真19は、ケニアで撮影されたものであり、学校らしい校庭で遊ぶ子供たちである。これは今回とりあげた19枚中、唯一の「明るい子どもたちの笑顔」がみられる「貴重」な写真である。

(2) 文章表現にかかわる課題

次に数少ないアフリカに関わる文章表現に注目する。教科書①には写真15の説明で「アフリカで農業を指導する青年海外協力隊の人」「わざわざアフリカにまで行って、そのような大変なことをしなければならなかったのだろう…」(① p.44)とある。どうして写真の撮影場所が「ガーナ」と国名を表記せず「アフリカ」になっているのか。また「わざわざアフリカにまで行って」や「そのような大変なこと…」の表現も不自然である。

この根底には執筆担当者の、アフリカは「遠くにあり」「わざわざ行く」ところで、しかもそのようなところでの援助活動は、「大変」であるという誇張・偏見やステレオタイプ認識が存在するとしか考えられない。教科書④には「西アフリカのセネガルという国で…」(④ p.52)とある。同じ教科書にある他の国の表記には「…という国で…」というものはない。どうして単に「西アフリカのセネガルで…」ではいけないのか、どうして同じ教科書内の他の国と、表記を区別するのか疑問である。

同様に教科書⑤には、阪神淡路震災の時の「アフリカのウガンダから寄付…」(⑤ p.35)の記事がある。「…ウガンダには日本人の援助によって運営されている孤児院があります。この施設に入っている子供たちが、自分たちでバナナを売って…」と続く。「アフリカからの寄付、しかも孤児院から…」というこだわりのある表記が不自然である。「アフリカの」「ウガンダの」「孤児院の」子供たちが、「バナナを売って」寄付を申し出てくることは、そんなに強調され「特記」す

ることなのだろうか。孤児院はどこにもあるし、単に「ウガンダの子供たちからも援助が届いた。」とだけ表記の方が自然だと筆者は思う。

(3) アフリカ表記の特徴

以上まとめると、わが国の小学校6年生社会科下(5社=5冊)に登場するアフリカにかかわる写真は全部で19枚であり、そのうち実に14枚が、飢餓・紛争・自然災害など「マイナスイメージ」を含むものであった。また援助を受けているようすが3枚あった。そして日常生活の子供たちを描き、「笑顔」が見られたのは1枚しかなかった。また文章表現も、アフリカをステレオタイプにとらえ、偏見をもったと考えられる記述が見られた。

この事実は、前述した菊池利夫(1960)のいう「偏見や偏狭」、山口幸男(1998)のいう「地域優劣意識」を増大させることになる。この点について久保田武(1968)はアフリカ学習では、誤解や偏見、例外的な事実強調、白人優位主義の視点からはアフリカの地域性にせまれないとしている⁽²⁵⁾。これらの指摘をふまえ、学習者とりわけ小学生に誤解や偏見に基づく誤った世界認識を持たせないためにも、原点に戻って改めて教科書記述内容を整理する必要がある。その際写真は慎重に選定されるべきであり、文章表現も十分に検討されなければならない。

5. 地理教科書に開発教育の視点を

わが国最初の世界地理の啓蒙書で教科書でもあった、福澤諭吉(1869)『世界国尽』⁽²⁶⁾では、「文明化=西欧文明化」の程度により、地域のランク付けが行われている(表6)。福澤はまず「蛮野」と「文明開化」の2つに大別し、次に蛮野を「混沌」と「蛮野」に、文明開化を「未開または半開」と「文明開化」に分けている⁽²⁷⁾。

この福澤の世界認識が後の日本社会に与えた影響は大きかった。明治のはじめ以来、異文化にランク付けし、欧米(西欧文明)以外の文化を見下げてきた日本人にとっては、第三世界の住民は「搾取の対象」であったが「対等な権利を持つ隣人」ではなかったのである。筆者にはこの誤った世界観=第三世界蔑視の視点(福澤のトラウマ)が、今も小学校教科書の世界地理分野に存在

していると思えてならない。

これまでの日本の国際理解教育は圧倒的に「先進国地域=欧米地域=英語圏」を対象にしてきた。ごくまれに欧米(西欧文明)以外の地域に目を向けることがあっても、それは興味本位の「見下げた」「蔑視」の視点でしかなかった。このことへの反省が必要である。

開発教育は「南北問題の解決をめざす、南北問題を中心においた国際理解教育」である。

具体的な目標には表7の5項目がある⁽²⁸⁾。中でも特に項目①の「多様性の尊重」は、福澤に欠けていた視点である。つまり、文化や文明をランク付けするのではなく、異文化住民を対等で同じ生命・人権を持つ人間として認める姿勢「文化相対主義の視点」を重要としている。

少なくとも社会科教科書の世界地理に関わる内容は、「多様性の尊重」の視点に立って記述すべきである。この対策として、小中学校では従来の欧米(西欧文明)中心の、「事例として取りあげる国」を改めるべきであると筆者は考える。

どの教科書も特にアメリカ合衆国の分量はもっと減らすべきである。なぜなら欧米の情報は、日常のニュースやマスメディアにあふれている。逆にアフリカを代表とする第三世界(途上国地域)の表記を増やし、現地住民の日常生活の見えるテーマの写真や話題を記述すべきである。その際、意識的に「マイナスイメージ」を助長するような内容は避ける必要がある。

6. 今後の課題とまとめ

アフリカは長いあいだ「暗黒大陸」と呼ばれてきた。だが、暗黒だったのはアフリカではなく、この大陸についての知識だったのである⁽²⁹⁾。そしてヨーロッパにおけるアフリカについての誤った情報問題は、本質的にヨーロッパの問題である⁽³⁰⁾。

明治のはじめ福澤は当時の欧米から入手した地理・歴史書を翻訳し、紹介するという形で『世界国尽』を著した。したがってこのような福澤の視点は、当時の欧米人の世界認識を反映したものであり、福澤一人に原因があるのではない。しかしその結果、日本の世界地理教育は地域・国家のランク付けから始まってしまった。

そしてその後、この福澤により間接的に日本に持ち込まれた「ヨーロッパ人の世界認識」は、「日本人自身の誤った第三世界認識」となった。つまり、日本における第三世界についての誤った情報問題は、実質的には「日本の問題」なのである。そしてそれは「日本の地理教育のかかえる問題」でもある。

大谷猛夫(2003)は近年の地理教育の縮小を危惧し、「日本中の中学校でAALA諸国のことを学ばない、という時代がやってくる。こんな状況を放置しておくことはできない」と述べている⁽⁸¹⁾。また寺本潔(1990)は、日本の中学生はすでに小学生までに共産圏忌避、第三世界軽視、そして欧米重視の世界観が形成されつつあるとし、問題点を指摘している⁽⁸²⁾。この二人の指摘は、福澤の「地域ランク付け世界地理」のトラウマから抜け出す意味も含め、今後のわが国の地理教育の方向を示唆するものである。

私たちは第三世界との関わりにおいて国際化する時代に生活している。このことをふまえた今後の地理教育のあり方が迫られている。開発教育の視点を積極的に取り入れ、第三世界の開発問題を教材化することで、南北問題の社会構造に焦点が当たり、途上国の地域性の理解可能になる。その結果、途上国への偏見を取り除けると筆者は考えている。

グローバル化・環境問題・民族問題・貧困と紛争…と激動する現代社会の中で人類の未来は、同じ「宇宙船地球号の乗客」として、異文化理解を乗り越え「多文化共生の価値観」を共有できるかどうかにかかっている。

私は南北問題の解決に正面から取り組む開発教育の視点を日本で拡大することが、「国益」のみを優先してきた明治以来の偏狭な日本人の世界認識を変革し、地球益＝「地球全体の開発」の分野で活躍できる人材の育成に結びつくことを確信している。

わが国が国際社会から尊敬されるためには、第三世界への対等な世界認識を持つ若者を育てなければならない。そしてそのためには開発教育を積極的に導入・拡大し、地理教科書においても「正しい世界認識」をめざした記述が一層重要になる。私は今後も根気強く地理教育分野から

の発言を続けたいと考えている。

〈注〉

- (1) 朝日新聞 2004年2月3日付の記事。
- (2) 琉球新報(夕刊)2004年2月3日付の記事。
- (3) 小学校教科書(表1)では、①に写真「アメリカ・イギリス両国によるイラクの空爆」(p.50)、②に写真「紛争で家を追われた人々(イラク)」(p.45)の2か所に登場するのみ。中学校(表2)では⑥に地図(p.9)と、「…ペルシャ湾を中心に…イラン、イラク、サウジアラビアなどの国々が見つらなる。」(p.20)が、⑨に「西アジアのイラクはチグリス川とユーフラテス川の二つの大きな川の流域の低地を意味している。」(p.30)の3か所に登場するのみである。
- (4) 中山修一(1991)『地理にめざめたアメリカ全米地理教育復興運動一』古今書院、pp.12-17。
- (5) 西岡尚也(1999)新学習指導要領にみる地理教育軽視の方向—高校「地理歴史科」における地理を例として—、岐阜地理第43号 pp.152-156。
- (6) 西岡尚也(2001)開発教育のなかの異文化理解、地理46-2、pp.11-15。
- (7) 菊池利夫(1976)生涯教育の一環としての高校地理教育、菊池利夫編著『高校地理教育の原理と方法』古今書院、pp.17-29。
- (8) 日生連(日本生活教育連盟：1948年発足)は、すでに半世紀前に「発達段階系列表」(日本生活教育連盟・社会科指導計画1955年6月)を発表し、発達段階に応じた地理教育のについて述べている。例えば、小学校中学年で「それぞれの社会的事実について地理的な関係がわかる」、高学年で「問題地理を中心に各地の特色がわかる」、中学校で「世界諸地域の特色を全体的に把らえ、世界を統一的に理解する」とある。日本生活教育連盟編(1955)『社会科指導計画—総説編・生活教育の前進—』誠文堂新光社、p.225。
- (9) 菊池利夫(1960)『地理学習の原理と方法』金子書房、p.301。
- (10) 山口幸男(1998)国士学習の改善点と授業改革の焦点、社会科教育12月臨時増刊、pp.94-97。山口幸男(2002)『社会科地理教育論』古今書院、p.127。
- (11) 開発教育の目標・定義には様々なものがあ

るが(西岡 1996)、筆者は開発教育を「南北問題の解決をめざす、南北問題を中心に置いた国際理解教育」と定義する。前掲(6)p.14。

(12) ただし、もう一つの教科書である「地図帳」の使用開始は4年生からである。したがって教員によっては、意欲的に地図帳を活用し子供たちが世界地図に接する機会を6学年後半以前に設けている場合も考えられる。けれども多くの場合は「地図帳」を十分に活用できていない。

(13) 文部科学省『小学校学習指導要領社会編』1999年発行、p.152。これにしたがえば2004年2月現在イラクは最も「我が国と関係が深い国」であるといえるだろう。

(14) 前掲(13)p.155。

(15) 1学年で地理分野を、2学年で歴史分野を学習する場合(ザブトン型カリキュラム)と、1～2年で地理分野と歴史分野を並行して学習する場合(π型カリキュラム)がある。どちらの型も3学年で公民分野を学習する。

(16) 文部科学省『中学校学習指導要領解説—社会編—』1999年発行、p.177。

(17) 前掲(9)p.182。

(18) 朝倉隆太郎(1955)高等学校の地理教育、日本地理教育学会編(1955)『新地理教育』金子書房 p.184。

(19) 前嶋郁雄(1995)地理写真とカメラ、地理40巻5号 p.38。

(20) 教科書④セネガルの写真は、厳密に言えば2枚だが、同じテーマの組写真で、しかも一部が重ねて記載されているためここでは1枚に数える。教科書④ p.52。

(21) ①の3枚は指導書にも撮影場所(国)の解説はないが、写真2は写真6(③ p.46)に同じであることから判断しコンゴ共和国であることがわかる。写真13は写真14(② p.45)に同じでチュニジア、写真15は高校地理A(教育出版・地A002・2002年検定)の図録11に同じものがありその説明からガーナであることがわかる。②の1枚は、教師用指導書・第2部朱書編 p.27よりエチオピアであることがわかる。⑤の4枚については、写真8・9・10は指導書にも撮影場所の記載がなく不明。写真20についてはケニアという説明が指導書にある。いずれにせよこれら

8枚の写真は、教科書を使用する学習者には撮影国がわからない。撮影国と撮影年月日の不明な地理写真はその価値を失っているといえる。

(22) 検診とは「病気の有無を検査する診察」の意味で、写真10は検診ではない。飲み物を飲ませているようすである。

(23) 地理の教科書に撮影国を明示しない写真は載せることは避けるべきである。

(24) 前掲(21)にある写真15の説明参照。

(25) 畔上昭雄(1968)アフリカ学習の内容と扱い方、木内信蔵監修・斑目文雄編(1968)『世界地誌の教材と指導(講座・社会科地理教育第5巻)』明治図書 p.191。

(26) 正式名、福澤諭吉訳述『頭書大全世界図鑑』。

(27) 福澤諭吉(1870)『世界図鑑』慶應義塾版、pp.14-17。

(28) 開発教育協会、<http://www.dear.or.jp/>参照。

(29) 森本哲郎編(1979)『NHK文化シリーズ・歴史と文明、埋もれた古代都市第6巻、アフリカ古王国の秘密』集英社 p.1。

(30) O.オスラー編、中里亜夫監訳(2002)『世界の開発教育—教師のためのグローバルカリキュラム—』明石書店 p.197。

(31) 大谷猛夫(2002)新学習指導要領下での中学地理年間プラン、歴史地理教育 No.635、p.19。

(32) 寺本潔(1990)中学校社会科の創造と展開—地理的分野—、魚住忠久・山根栄次共編(1990)『初等・中等社会科教育』学術図書出版社、p.136。

〈 文献 〉

・西岡尚也(1995)わが国における開発教育の動向と課題—第三世界との新たな関係を構築する教育への一試論—、佛教大学大学院紀要第23号 pp.95-119。

・西岡尚也(1996)『開発教育のすすめ—南北共生時代の国際理解教育—』かもがわ出版。

・西岡尚也(1997)初等教育地理教科書類にみる第三世界(途上国地域)記述の記述変化—開発教育の視点から世界地誌の復興を考える—、新地理第45巻2号 pp.35-48

・西岡尚也(1999)開発教育と地理教育の関連についての一考察、千里山文学論集第62号 pp.81-93。